

《論 文》

親からの期待の認知と自閉症スペクトラム指数との関連

生 駒 忍

The relationship between perceived parental expectations and the Autism-Spectrum Quotient (AQ)

SHINOBU IKOMA

キーワード

自閉症スペクトラム (autism-spectrum), 親からの期待 (parental expectations), 性差 (gender differences), 父母差 (father-mother differences)

親が子にさまざまな期待を向けつつ子育てを行うことは、洋の東西を問わない。子にとってこの期待は、ある時は大きな励みになり、またある時は大きな負担になる。いずれにしても、育ち方を、そして人生を決める要因となる。多くの研究がその影響力の大きさを明らかにしており (Carvalhoes, 2010; Catsambis, 2001; Singh-Manoux, Fonagy, & Marmot, 2006), 期待が過剰だとしてもあまり否定的にとらえないほうがよいという見解 (刀根, 2012) さえある。

近年では、親の期待そのものというよりも、子がそれを認知することのほうに着目した研究が多く見られる。養育行動の研究では、親が子について思っているものと子がとらえているものが同じではないことが広く知られ、検討対象となっている (De Los Reyes & Kazdin, 2005 参照)。親が子に向ける期待についても、そのような不一致が見られる。親の期待と子におけるその認知とを対比させた上山 (2007) は、子が認知する以上に親自身の期待は高いことから、子は必ずしもその全てを受け止めているわけではないと指摘している。

親の中に期待が存在するだけで自動的に影響が発生するわけではなく、それが当人に認知されて初めて、子が親の期待に応えようとした

り、あるいは期待に反発したりすることは自明である。Kreider, Caspe, Kennedy, & Weiss (2007) も、親が期待をどれだけ伝えコミュニケーションするかが重要であると指摘している。そのため、親からの期待の認知に着目することはその影響力の本質をとらえるために有用であり、研究数も増えている。そして、渡部・新井 (2008) はその研究動向を整理しつつ、複数の認知的成分に焦点を当てた検討を行っていく必要性があると論じている。これを受けるとして、近年の研究は、期待の多寡のみに留まらず、その期待の受け止め方、受け止めによる負担感や動機づけの促進、それらから心理的適応への影響といった側面まで射程を広げるようになってきている (例えば、武田, 2011; 渡部・新井・濱口, 2012)。

一方で、そういった変数に影響を及ぼす基となる親からの期待の認知自体が、どのような要因によりどのように影響されるかという視点は、必ずしも多く見られるものではない。それも、学校段階、期待する側の父母の別、国際比較といった、社会調査としては一般的ではあるが心理学の立場から見ると外形的な印象の強い変数を取り上げたものが大半である。親子関係と期待の認知との関係については勝田 (2009)

(231)

が検討しているが、典型的に親子関係をとらえ、あくまで親から子への影響として扱っている。武田（2011）も親子関係に関する検討を行ってはいるが、そもそも期待の認知自体は取り上げていない。したがって、親からの期待の心理学的研究において重視されてよい中核的な変数でありながら、期待を受ける側の内的、特性的な要因との関連の解明は進んでいないと言わざるを得ない。

そこで本研究では、親からの期待の認知と、特性要因である自閉症スペクトラム傾向との関連に着目し、自閉症スペクトラム指数 (Autism-Spectrum Quotient: AQ) を用いることで検討する。Kanner (1943, 1949) 以来しばらくの間は、自閉症は特異な情緒障害としてとらえられることが多かったが、近年ではアスペルガー障害や高機能自閉症への理解や関心が学術的にも社会的にも高まったこともあり、医学的に自閉症と診断される人とそうでない「健常者」とが本質的には連続しており、その傾向（本稿では「自閉症スペクトラム傾向」と表記する）の強さが安定した個人差として広汎に存在するという自閉症スペクトラム仮説が注目や支持を集めている。AQはそれを定量的に測定する、Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin, & Clubley (2001) によって開発された心理尺度である。自閉症やそのスペクトラムに見られる典型的な特徴の一つに、他者の意図や関心の推測ないしは検出、あるいはそれへ関心を持つことが困難であるということが挙げられる。すると、親からの期待の認知は、この自閉症スペクトラム傾向の影響を受けると予測される。この傾向が強ければ、親から自分に期待が向けられていても、それを適切に理解し認知することは難しくなるだろう。

ところで、春日・宇都宮（2011）は、親の期待の認知に関して「人間性期待」「教育・就職期待」の2因子を得たうち、前者には性差があり、女性のほうが男性よりも高いという結果を報告している。また、河村（2003）は5因子を得ているが、春日・宇都宮（2011）では性差が

認められなかった「教育・就職期待」に内容的に類似した「就職期待」因子においては性差を認めており、同様に女性のほうが男性よりも高い。この差の原因を、河村（2003）は今日の学校や日本社会のジェンダー的要因に求めている。しかし、AQ得点にも性差があり、男性のほうが高いという報告がある（若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004）ことから、そのような社会文化的な外部要因を考えずとも、本人の自閉症スペクトラム傾向という個人内の安定的な特性に基づいて説明できる可能性がある。もし、予測通り、AQの高さが期待の認知を低くするのであれば、春日・宇都宮（2011）や河村（2003）でみられたような、男性で期待の認知が低く、女性で高いという性差は、AQが男性で高く、女性で低いという報告と対応させることで説明が可能となる。

一方で、性差については否定的な知見を得ている研究も見られる。子安・郷式（2007）は、期待の認知の15項目ある質問項目毎の分散分析、および全項目を込みにした多変量分散分析のいずれにおいても性差を見いだしていない。そこで本研究では、春日・宇都宮（2011）が報告している性差の再現性についても検討対象とする。そのため、春日・宇都宮（2011）と同様に、大学生を対象とした質問紙調査によって検討を行うこととする。

方法

調査参加者 首都圏の大学に在学する大学生141名（男性110名・女性31名；平均年齢19.28歳）が調査に参加した。

手続き 授業終了後に調査協力を依頼し、質問紙を配布し回答を求めた。調査時期は、2012年5月であった。

質問紙 配布された質問紙には、フェイスシートに続き以下の質問項目を配置した。

①父親からの期待の認知 大学入学までに父親（ないしはそれに相当する人物）からかけられた期待についての29項目を使用した。これ

は、春日・宇都宮（2011）の本調査の分析で、因子分析の結果採用された「人間性期待」18項目と「教育・就職期待」11項目とをほぼそのまま用いたものであった。変更点は、春日・宇都宮（2011）での「挨拶が出来る人間になってほしい」「良い伴侶を見つけてほしい」を、常用漢字表に含まれない漢字¹⁾を避けるなどして調査参加者にとっての読みやすさや分かりやすさを向上させるべく、それぞれ「あいさつができる人間になってほしい」「良い結婚相手を見つけてほしい」と修正した点である。なお、父親ないしはそれに相当する人物が思い当たらない場合には、この設問への回答は飛ばすよう教示した。

②母親からの期待の認知 大学入学までに母親（ないしはそれに相当する人物）からかけられた期待について、父親についてのものと同一の29項目を使用した。対象人物が思い当たらない場合には飛ばすよう教示したことも同様である。

③自閉症スペクトラム指数（AQ） 若林他（2004）によって、Baron-Cohen et al.（2001）のAutism-Spectrum Quotientの日本語版として翻訳および標準化が行われた全50項目を使用した。ただし、若林他（2004）の原版では、項目中の句読点が「、」「。」となっているが、本研究では全て「、」「。」に改めた。

④恥に対する過敏性 AQに続けて、落合・阪（2002）からの10項目を配置したが、本研究とは異なる研究目的のために付加したものであり、ここでの分析対象にはしない。

以上全てに対して、1. あてはまる 2. どちらかといえばあてはまる 3. どちらかといえばあてはまらない 4. あてはまらないの4件法により回答を求めた。

1) 「挨拶」は現在の常用漢字表には含まれているが、いずれも2010年11月の公布で追加された漢字であることから、高等学校までの教育で学ぶ機会がなかった調査参加者も多いと考えられる。公布前に三好・生駒（2010）が行った大学生を対象としての主観的出現頻度の調査でも、特に「挨拶」の標準偏差は目立って高く、理解度に大きなばらつきがある可能性がうかがえる。

結果

回答不備等がなく全項目に回答した119名（男性92名・女性27名）のデータを分析対象とした。統計的検定の有意水準は、全て.05とした。

期待の認知の内的一貫性 春日・宇都宮（2011）が用いたもののそのままではなく、一部の表記を変更して実施したため、念のためCronbach（1951）の α 係数を算出し内的一貫性を確認した。その結果、父親の「人間性期待」で $\alpha = .949$ 、「教育・就職期待」で $\alpha = .907$ 、母親の「人間性期待」で $\alpha = .952$ 、「教育・就職期待」で $\alpha = .922$ といった係数が得られ、いずれも十分な内的一貫性が確認された。春日・宇都宮（2011）の報告では、父母の得点を合算した上で内的一貫性を検討しているが、そこでは「人間性期待」で $\alpha = .92$ 、「教育・就職期待」で $\alpha = .90$ と報告されていることから、それらと比べても良好な値が得られたといえる。

性差の分析 回答者の性別毎に、父親・母親別それぞれからの各期待の認知について項目得点の平均（期待の認知が強いほど値は低くなる）を求めたところ、図1のようになった。それぞれに対応のある t 検定を行ったが、有意な差が認められたものはなかった（ $t_s(117) = .266, .458, 1.281, .012$ ）。

性別を参加者間要因、父親／母親および期待の種類を参加者内要因とした3要因混合計画による分散分析を行ったところ、父親／母親の主効果が有意であり（ $F(1, 117) = 14.72$ ）、父親からの期待の認知よりも母親からの期待の認知のほうが強いことが示された。期待の種類的主効果、性別の主効果、および1次の交互作用はいずれも有意でなかった。2次の交互作用は有意であった（ $F(1, 117) = 10.11$ ）。

自閉症スペクトラム指数（AQ）は、自閉症スペクトラム傾向が強いほど高得点となるように単純合計し得点化された。対応のない t 検定により性差の有無を検討したところ、 $t(117)$

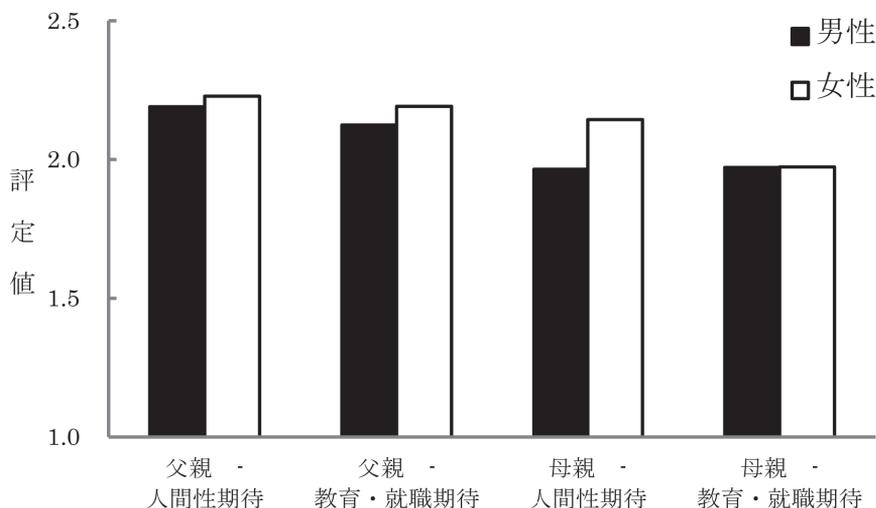


図1 条件毎にみた親からの期待の平均評定値

表1 親の期待の認知の強さとAQ得点との相関

父親 - 人間性期待	父親 - 教育・就職期待	母親 - 人間性期待	母親 - 教育・就職期待
-0.125	-0.229	-0.268	-0.354

= .102となり、有意な差は認められなかった。

期待の認知と自閉症スペクトラム指数との関連 それぞれの期待の種類毎の強さ（評定値を反転させたもの）とAQ得点との積率相関係数は、表1に示したようになった。それぞれについてt分布を用いた無相関検定を行ったところ、父親の「教育・就職期待」、母親の「人間性期待」および「教育・就職期待」が有意であり ($t_s(117) = 2.545, 3.009, 4.081$)、父親の「人間性期待」のみ有意ではなかった。

考察

本研究は、親からの期待の認知と自閉症スペクトラム指数 (AQ) との関連について、大学生を対象とした回顧的調査によって検討することを目的とした。分析の結果は、一部を除き期待の認知とAQとの間に負の相関関係があることを認め、AQが高いほど親からの期待の認知の程度が低いことが明らかになった。これは、

自閉症スペクトラム傾向が強いと親から受けている期待を適切に検出することが難しくなり、期待の認知が生じにくくなるという予測を支持するものである。

父親からの期待と母親からの期待とを比較すると、その認知は全体的にみて母親からのもののほうが強いという結果が得られた。これは、定量的な質問紙調査や、半構造化面接による検討 (伊藤, 2009) のような質的手法も含む先行研究において得られている父母差と合致し、整合しているといえる。本研究の対象者のほとんどが、男女共同参画が広くうたわれるようになった1990年代後半以降の日本社会で育てられており、父親の家庭回帰現象の顕在化 (少子・家庭政策研究所, 2007) とも接触があると考えられるが、それでもなお父母差が認められることは興味深い。

親からの期待の認知については、春日・宇都宮 (2011) が性差の存在を報告する一方で、否定的な研究も以前から見られることから、本研

究は性差の再現性を検討することも目的としていた。その結果は、図1からも明らかであるように、春日・宇都宮(2011)の「人間性期待」「教育・就職期待」の双方とも、性差を認めないというものであった。内的一貫性は十分にあり、春日・宇都宮(2011)が得たものとはほぼ等しい α 係数が得られたことから、本研究のデータの統計的信頼性に難があったことで有意な差が得られにくくなったとは考えにくい。もちろん、本研究のほうが標本が小さいために、検定力において劣るという考え方は、それ自体は誤りではない。しかし少なくとも、本研究で分析対象とした人数であっても、G*Power 3 (Faul, Erdfelder, Lang, & Buchner, 2007)を用いて大きな効果量 (Cohen, 1992) を検出できる検定力を求めると、.952という十分な値が得られる。よって、親の期待の認知において何らの性差を認めない知見が他にも報告されていること、春日・宇都宮(2011)でも性差が得られるかどうかは諸条件のうち半々ずつであったことなどを考え合わせると、期待の認知における性差は、もしあったとしても大きなものではないと考えるのが自然であろう。

AQ得点についても、本研究では性差は認められなかった。これは、若林他(2004)が大学生から得た知見とは一致しない。そのため、親の期待の認知について報告された性差をAQの性差で説明できるのではないかという、本研究が当初想定した可能性を当てはめることは難しい。しかし、男性の得点が女性のそれを上回ることは、自閉症スペクトラムに関するBaron-Cohen(2004)などの主張に沿うものではあるものの、少なくともわが国では、必ずしも一貫して明瞭に得られるものではないようである。例えば、エゴ・レジリエンスや楽観性等との関連を検討するためにAQ短縮版であるAQ-J-10を用いた松田(2009)のデータを見ると、むしろ男子学生よりも女子学生のほうがやや高い傾向がうかがえる。小林(2006)の調査では、広汎性発達障害傾向を示す大学生は男性で5.0%、女性で4.1%という比率であり、男性にやや多い

傾向はあるものの、大きな差であるとは言にくい。そもそも、若林他(2004)においても、大学生では有意な性差が認められたが、それは標本の大きさが4桁に上る検定力の高い状態で得られており、合わせて行われた一般社会人を対象とした検討では性差は仮説通りの方向ではあったものの、有意水準にまで達するものではなかった。コホート要因や、アスペルガー障害の顕在化に地域差がある可能性(崎濱, 2006)なども含むサンプリングに関わる要因が寄与しているのかも知れない。

親からの期待の認知に関する近年の研究は、単に認知の多寡だけに焦点を当ててのではなく、その期待の受け止め方、受け止めによる負担感や動機づけの促進、それらから心理的適応への影響といった、因果モデル的に見てより下流に位置する変数へも関心を向けている。そういった研究の知見の範囲では、AQが高いことによって期待の認知が低減されたならば、これらの下流の変数にも順次、影響が波及していくと想定できることから、本研究が示したものは親の期待研究に広く関わる、意義のある知見であると考えることができる。一方で例えば、他者からの期待への応え方には自閉症スペクトラムに特徴的なパターンないしは偏りが想定できることから、因果モデルの途中にもAQからの影響が加わるなど、より複雑な形で関わってくる可能性も考えられる。あるいは、親からの期待と完全主義との間の関連(河村, 2003)と、自閉症と完全主義との関連(Lawson, 2010)とは、本研究の知見を挟むことでつながるように見えるが、三者の関係はそう単純なものではない。親からの期待と完全主義とは正の関連を、自閉症と完全主義とも正の関連を示すが、期待とAQとの関連は負であり、三者全てを単純な共変関係で結ぶことは成立し得ないためである。では、これらの間の因果関係はどのようなものなのであろうか。こういった視点を持ち込みつつ、さらなる実証的研究を進めることで、親の期待の認知とその影響過程に関して、より精緻な解明が進むことが期待される。

なお、本研究が示したAQとの関連については、技術的な制約のため、今回のデータからはいくつかの異なる解釈を完全には排除することができない。一つは、AQと期待の認知との双方に影響するような第三の変数による偽相関の可能性である。とはいえ、自閉症スペクトラム傾向が発達早期から観察され安定性を持つことから、それより時間的、原理的に先行するような第三の変数を想定することになり、AQを従属変数のように扱う北添・泉本（2011）のような立場も見られるものの、やや不自然な解釈ではある。これに関しては、パネル調査を行い交差遅れ効果モデルを適用するなどの方法で、変数間の因果関係をより明確にする対応が考えられる。海外では、大規模な縦断的データを用いた親の期待に関する分析も報告されており（Froiland, Peterson, & Davison, in press; Williams Shanks & Destin, 2009）、わが国でもこれらと比較対照できるような調査が実現できればなおよい。

また、AQからの直接の因果関係を想定した子の側の認知より以前の段階で、親の側がかかる期待自体の多寡において子の自閉症スペクトラム傾向の影響が生じている可能性も考えられる。障害児のきょうだいに関する研究では、障害児ではなく健常な子どものほうに過剰な期待をかけることがあることが知られ（吉川, 2001）、また、親は中途障害児に対しては期待を以前より下げる（Poznanski, 1973）。こういった知見を、連続性を想定する自閉症スペクトラム仮説に合わせて拡張すると、子が保持している、ないしは子が親に認識させる自閉症的な性向ゆえに、親が期待を喪失したり、早期から期待を形成しないままであったりするという解釈も可能ではある。あるいは、自閉症スペクトラムには遺伝的な側面があるという近年の議論（鷺見, 2012参照）からは、子のAQが高いことは親の側にもそのような特性がある程度あることが示唆され、これが子に期待するという行動や態度の発現に影響している可能性も否定できない。ただし、これらの検証は容易ではな

く、子だけではなく親子双方を対象としペアデータとして対応させてのデータ収集および分析が必須であり、また、ナイーブな性質を持つテーマを扱うことから、倫理的な配慮にも十分な留意が求められる。

3点目として、本研究は大学生を対象とした回顧的調査の手法を採っているため、期待の認知自体というよりも、調査実施時点で想起された期待の記憶の質が反映されている可能性を挙げておきたい。記憶には、忘却により欠損を起こすのみならず、想起内容が自身に肯定的ないしは快である方向にゆがむ性質もあることが広く報告されている（Conway, 2005; 生駒, 2012）。これは、人生上の経験を扱う調査研究では、質問紙法であれ面接法であれ避けきれない限界ではある。これに関しては、大学生に比べ親から心理的にも、時間的、空間的にも分離している程度の低い中学生や高校生を対象として、記憶であるとはいえより近接しており明瞭であることが期待できるものを扱うことで、一定の改善が図れよう。特に、中学生に関しては、今日でも実証研究が十分ではないとされており（渡部他, 2012）、その点での意義も期待できる。

引用文献

- Baron-Cohen, S. (2004) *Essential difference*. London: Penguin.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E. (2001) The Autism-Spectrum Quotient (AQ): Evidence from Asperger syndrome/high functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 5-17.
- Carvalhoes, E. F. S. (2010) Effects of parental involvement on first graders' approaches to learning. E. M. Douglas (Ed.), *Innovations in child and family policy: Multidisciplinary research and perspectives on strengthening children and their families*. Lanham, Md.: Lexington Books, pp. 29-47.
- Catsambis, S. (2001) Expanding knowledge of parental involvement in children's secondary education: Connections with high school seniors' academic success. *Social Psychology of Education*, 5, 149-177.
- Cohen, J. (1992) A power primer. *Psychological Bulletin*,

- 112, 155-159.
- Conway, M. A. (2005) Memory and the self. *Journal of Memory and Language*, 53, 594-628.
- Cronbach, L. J. (1951) Coefficient alpha and the internal structure of tests. *Psychometrika*, 16, 297-334.
- De Los Reyes, A. & Kazdin, A. E. (2005) Informant discrepancies in the assessment of childhood psychopathology: A critical review, theoretical framework, and recommendations for further study. *Psychological Bulletin*, 131, 483-509.
- Faul, F., Erdfelder, E., Lang, A.-G., & Buchner, A. (2007) G*Power 3: A flexible statistical power analysis program for the social, behavioral, and biomedical sciences. *Behavior Research Methods*, 39, 175-191.
- Froiland, J. M., Peterson, A., & Davison, M. L. (in press) The long-term effects of early parent involvement and parent expectation in the USA. *School Psychology International*.
- 生駒 忍 (2012) 「情報源の記憶」川崎恵里子 (編) 『認知心理学の新展開 言語と記憶』ナカニシヤ出版 pp. 90-111.
- 少子・家庭政策研究所 (2007) 『子育て期の家族を支えるコミュニティ活動の展開—父親の活動をめぐって—調査研究報告書』(財) ひょうご震災記念21世紀研究機構
- 伊藤忠弘 (2009) 「大学生の親子関係の認知と親からの期待・プレッシャー経験—他者志向的動機づけを規定する要因の予備的分析—」『青山心理学研究』, 9, 11-22.
- Kanner, L. (1943) Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250.
- Kanner, L. (1949) Problems of nosology and psychodynamics in early childhood autism. *American Journal of Orthopsychiatry*, 19, 416-426.
- 春日秀朗・宇都宮博 (2011) 「親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響—子どもの期待に対する反応様式に注目して—」『立命館人間科学研究』, 22, 45-55.
- 勝田 萌 (2009) 「青年の認知する親の期待・養育態度と過剰適応との関連」『日本教育心理学会第51回総会発表論文集』, 528.
- 河村照美 (2003) 「親からの期待と青年の完全主義傾向との関連」『九州大学心理学研究』, 4, 101-110.
- 北添紀子・泉本雄司 (2011) 「社交場面の不安・恐怖が the Autism-Spectrum Quotient (AQ) に及ぼす影響」『第52回児童青年精神医学会総会プログラム・抄録集』, 210.
- 小林由佳 (2006) 「大学生における軽度発達障害に関する調査とその支援」『研究助成論文集』(明治安田こころの健康財団), 42, 30-36.
- 子安増生・郷式 徹 (2007) 「大学生における両親の期待度とその実現度の認知の比較」『京都大学大学院教育学研究科紀要』, 53, 1-12.
- Kreider, H., Caspe, M., Kennedy, S., & Weiss, H. (2007) Family involvement in middle and high school students' education. *Family Involvement Makes a Difference*, 3.
- Lawson, J. (2010) An investigation into the behaviours which challenge at university: The impact of neurotypical expectations on autistic students. *Good Autism Practice*, 11, 45-51.
- 松田美登子 (2009) 「大学生の自閉症スペクトラムに関する研究 (2) —自閉症スペクトラム指数10項目短縮版 (AQ-J-10) とレジリエンス, 楽観性, 時間的信念との関連性—」『日本パーソナリティ心理学会第18回大会発表論文集』, 112-113.
- 三好一英・生駒 忍 (2010) 「新常用漢字197字の主観的出現頻度に関する調査」『日本教育工学会第26回全国大会講演論文集』, 633-634.
- 落合佐敏・阪 武彦 (2002) 「自己愛心性の研究 (2) 恥感情と攻撃性を測定する質問紙の研究」『鳴門生徒指導研究』, 12, 46-59.
- Poznanski, E. O. (1973) Emotional issues in raising handicapped children. *Rehabilitation Literature*, 34, 322-326.
- 崎濱盛三 (2006) 「地域性との関連はあるのですか?」『こころの臨床 à la carte』, 25(2), 26.
- Singh-Manoux, A., Fonagy, P., & Marmot, M. (2006) The relationship between parenting dimensions and adult achievement: Evidence from the Whitehall II Study. *International Journal of Behavioral Medicine*, 13, 320-329.
- 鷺見 聡 (2012) 「自閉症スペクトラムの遺伝子研究の現状」『こころの科学』, 161, 2-5.
- 武田真梨子 (2011) 「親の期待と子どもの受けとめ方—子どもの将来への意欲と自己否定感に与える影響—」『神奈川県公立中学校の生徒と保護者に関する調査報告書』ベネッセコーポレーション pp. 30-39.
- 刀根良典 (2012) 「親の期待に重圧を感じている子—構成された教育相談の手法で子どもと親との両方を支援する」『児童心理』, 66(14), 76-80.
- 上山香織 (2007) 「親からの期待と小学生の競争意欲との関連」『臨床教育心理学研究』, 33, 90.
- 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S.・Wheelwright, S. (2004) 「自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討—」『心理学研究』, 75, 78-84.
- 渡部雪子・新井邦二郎 (2008) 「親の期待研究の動向と展望」『筑波大学心理学研究』, 36, 75-83.
- 渡部雪子・新井邦二郎・濱口佳和 (2012) 「中学生における親の期待の受け止め方と適応との関連」『教育

心理学研究』, 60, 15-27.
Williams Shanks, T. R. & Destin, M. (2009) Parental expectations and educational outcomes for young African American adults: Do household assets

matter? *Race and Social Problems*, 1, 27-35.
吉川かおり (2001) 「障害児者の「きょうだい」が持つ当事者性—セルフヘルプ・グループの意義—」『東洋大学社会学部紀要』, 68, 105-118.